樺太の民屋

島之夫

一　オロッコ・ギリヤークの家屋

人種學上ツングース族に屬するオロッコと古シベリア族に屬するギリヤークとは共に日本領樺太の北部幌内川の流域に住居する者である。此の兩者はその生活に於て極めて類似するが故に此處に一括して取扱ふこととする。彼等の住地は我が國に於ける最寒の地で、假りに敷香に就いて見るに年平均氣溫零下〇・三度、一月平均零下一八・〇度、八月平均一五・七度といふ程度である。又我が國に於ける最寡雨の地方であつて、敷香の年平均降水量は七四四粍である。幌内川下流の低濕なるツンドラには矮小なる落葉松と水苔類とが生育するに過ぎない。

彼等は其處で夏は魚を獲り、冬は山林冬籠りする。住居として彼等は夏の家と冬の家とを持つてゐる。季節に依つて彼等は自然件の變化と共に移動するからである。

「樺太土人の生活」（工學士　長嶋八著　大正十四年　洪洋社）の記すところ依るに「部落と言ふのは彼等の言葉でガサ[illegible]するのであるが……ガサといふのは絶えずくのである。……彼等の部落は冬と夏とにおいてその場所を異にする。冬は川上の山奥へ夏は川だとか海だとかの沿岸につくる樣だそして彼等の原籍とも言ふべきものは冬の[illegible]である。家の構造に於ても大部分の相違をめ得る。」とある。

以下前掲書より拔粹しつつ彼等の家屋に就いて說明しよう。

A　夏の住家

丸太掘建で周圍及屋根は椴松・蝦夷松等の樹皮を以て作り、屋根は切妻式で建上げ六七尺位を通例とする。室の廣さは五坪內外だが、時としては八坪位のものもある。兩妻下部中央に漸く出入し得る程度の入口を設け、獸皮若くは莚・木綿等數枚重ね刺したものを上方より垂れ下げて扉とする。屋內中央ともおぼしき所には大なる爐を設ける。爐緣は概ね椴松・蝦夷松等を長方形に組合はせたものである。土間の「マロ」には松葉又は乾草等を敷詰め其上に起臥する。稀に薄緣若くは馴鹿の皮を敷いてある。

オロッコ達は冬が來ると此の夏の住家を捨てて冬の住家に歸るのだが、それ等の住家をほごすことなしに、そのままにして再び此處へ歸つて來た時屋根をかけてすぐ寢起きが出來る樣にしてある。

樹木の不足な所で、杭の一本さへも容易に拔がし得られぬ惡ふした地では、家がないからと言つてさうたやすく建てる譯にもゆかない。

B　冬の住家

冬の家の事をオロッコ語で「ドグマ・ドウーク」と言ふし、ギリヤーク人に言はせると「ハグヅ」と言ふ。

室（室と言つた所で唯一つしかない）の大さは普通四坪內外、大なるものになると十坪からあるといふ。眞中とおぼしき所に爐がとられ、其前面に漸く出入りするだけの幅を持つ入口がとられてある。

家の骨組は棰「スエシギ」を四錐形に組立てる。そして屋根材としては帆とか木綿で作つた天幕を覆ひ掛ける。入口には獸皮又は木綿等の刺したものを上方から垂れ下げて扉としてある。此天幕を風にさらわれぬやうにするため更に棰を四方から建て集めて、內側（內部）の棰に繩で結びつける。

煙は圓錐形の頂點から出す樣にしてある。土間に松葉若くは乾草を敷詰め其上に起臥してゐる。

以上が建築學を專攻された長根助八氏の記述であるが、これとは又別の見地から明治四十一年東京地學協會編纂の「樺太地誌」によるとギリヤーク及びオロッコの家屋に關して、次の樣な說明がある。

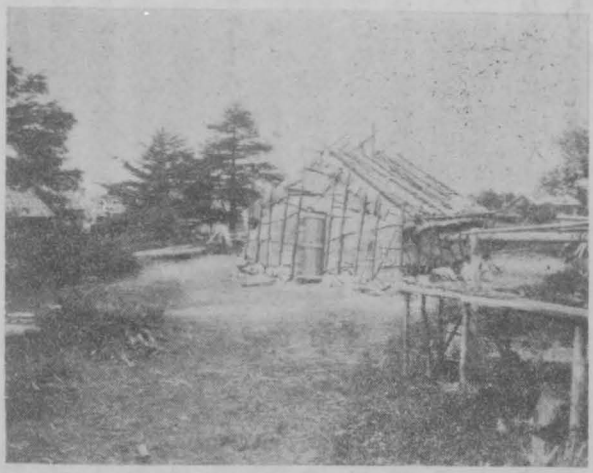
ギリヤーク　家屋の構造

「唐太ホロコタン邊家屋の製は、蝦夷或はオロッコの製と遙かに別にして、堅牢の物と思はる。其仕方は椴の木の經五六寸許りの二つ割又は四角なるを、長さ三間巾二間半程の大さに井桁に組み、四方高さ四尺餘にして棟の高さ九尺許に建て、丸木を其上に並べて垂木となし、其上に椴の皮を覆ひ、其上に又丸き丸太を左右よりよせかけて置なり。家根の中央に引窓を明け、入口は一方にて幅二尺竪三尺許りの潛りの如きものを明け出入に便にす、室內土間にて三方折曲げ壁に付て、高さ五六寸幅三尺許りの床をかき寢臥の處となす、土間の中央に幅四尺丈け一丈高さ四五寸又は一尺位に角木或は板を以て枠を拵へ爐となす。又本家の餘りを一間か九尺程入口の處に出し兩側を板を以て圍ひ、そこに棚を

第一圖　オロッコの家屋（敷香北方オタス島）

かき食物杯上げ置き、中を通行するなり。」倉庫は角木を井桁に組み、家根も角木を並べ置き、

第二圖　オロッコの家屋（敷香北方オタス島）



床下は四本柱高さ三四尺あり、飲料等を入れ置くなり、冬分は穴居すること蝦夷に異ならず。」

オロッコ

「觀國錄にオロッコ家屋の製作は丸太二本を柱に立て棟木をわたし、之れに丸木を四方より丸く立掛け、上に樺皮を覆ひて丸小屋となす、中に四本柱を中央に立て棚を拵へ、其下を爐となして火を焚く、幅一尺五六寸長さ九尺許あり、戸口は前後に幅一尺丈け四尺許りに明けたり、何れも同樣の製なり。」

要するにオロッコに於てもギリヤークに於ても、その家屋の特色は簡單なるテント式のものであり、その材料は彼等の住む土地に得られる種類のものである。

又彼等の冬の住家も夏の住家もその建築材料乃至は構造樣式には大差なく、只その生活の必要上季節によつて住居を移動するのである。例へば水草を追ふて流浪する遊牧民族の如きものである。

建築材料に乏しい此の地方では、細い落葉松か假松の丸太を用ひて骨組となし樹皮を以て屋根或は壁を造り、松葉や乾草を以て床を敷く。

それ以外には用ふべき材料を此の地の自然が供給して呉れないのである。

然しどんな貧弱な材料を以てしても、構造に於て最も簡單なテント式家屋ならば造營することが出來るのであり、彼等はそれによつて住居し得るのである。

一　アイヌの家屋

樺太に住むアイヌはその總數約一千四百で、邦領樺太の南部海岸の數ヶ所に政府の保護を受けて住んでゐるものが多い。

人種學的には北海道のアイヌと相異はないが、住む土地の自然條件が多少異るので、その家屋は北海道のものに比すると少しく異る點がある。

彼等の家屋には出入口に接して玄關とも稱すべき庭がある。北海道では「モセム」と呼ばれてゐるが、樺太では「チケトイ」と呼んでゐる。家屋の造りは北海道のものに比して粗末なことが際だつて目に留る。母屋の小屋組が北海道のものは寄棟であるが、樺太の方では大抵切妻になつてゐる。そしてチケトイも切妻である。

屋根が北海道のものは段々に葺いてあつて見たところ如何にも綺麗だが、樺太のものは莚で覆ふとか所々に木皮をのせるとかして如何にもおちぶれた人達が住む貧乏な家を想ひ起させる。時としては壁にも屋根にも丸太が使用されてゐることがある。此の丸太造の家屋は頗る原始的であつて、北海道の草葺のものに比すれば一層古い型式の樣に思はれる。

「樺太地誌」（東京地學協會編纂　明治四十一年）に彼等の家屋に就いて次の樣な記事がある。

「アイヌ族　家屋

家屋の構造は現今丸太式のものあれど、元來は柱を地に立て別に作りし屋根を乘せ、家屋も圍も悉く樹皮にて被ひ、紐にてからげ、內地人の如く釘を打つことなく只組合せて押へ置くのみ、室內は奧の部屋と其の入口の間の二室を常

とす、奥の間は巾三四間奥行四五間、全體板の間なるも左右に稍々高き段ありて腰掛け寢臺となる。兩所ともむしろを布き、家の中に爐を設く家根は天井なく中央引窓の如き穴ありて常に開き居り、只雨天の時のみ蓋をなす、此の窓は焚火の烟出しともなり、室の中を照す明取ともなる。又部屋の突き當りに小さき窓あり、こは熊祭りのとき之に要する道具類の出入に供し又は熊の肉を運び入れる際特に之を使用することあるのみ。室内にて使用する器具には、食事の木鉢、料理又は細工用のさまざまの小刀、海獸熊の獵具等あり、爐の上に自在釣あり、鍋を懸く又別に種々の框を釣り之に魚肉をかけ乾燥し居れり、入口は土間にして、これには食物の餘り又は不用のものを置き、臺所物置兼用とす、樺太アイヌは犬を多く飼用するを以て數多の犬が家の入口土間等に伏し居れり。又入口の前に別にさしかけを附せる家あり、斯る家は三部よりなるなり。此他支柱を高くし小さき建物を作りたるものあり、食物其他の物品を藏し、支柱の上部に木製の鍔を嵌め又はブリキ板を付け置き鼠の昇る能はざる樣にす、人のこれに上下するときは梯子を用ひ、不用のときは之を他に置き或は木のまたに立てかけ土地と絶緣す。」

此の文章の最後に記されてある建築物は穀物倉であつて、大體二間に三間位の廣さを持ち、Pu 又は Pui と呼ばれてゐる。特に樺太のものは丸太造りの校倉式のものが多い。

穀物倉は濕氣を防ぐためにも害蟲や害獸を防ぐためにも床を高くする必要がある。高さ五、六尺程の柱杭が四本か六本、建坪にして四坪内外の面積を占める位に地面に打たれる。柱杭の上部には「エリモシヨアルキタイ」と言つて鼠が柱杭を登つて倉の内に入ることの出來ない樣に構造したものがある。厚い板・皮・ブリキ等を使用してその上に横木がかけ渡されて梁となる。その上に床板が敷かれる。その上に小さな柱を持つ小屋が造られる。此れに昇るには一本

の木で出來た梯子が使用される。樺太のプイは北海道のものよりも見懸上立派に見える。それは材料が丸太であり、構造が校倉式であるからである。

三　移住民の家屋

樺太の住民の大部分を占めるものは內地よりの移住者である。彼等の大部分は北海道・東北地方・北陸地方等より移住したもので、大抵は丸太と板とを以て構造した所謂バラック建の家屋に住んでゐる。

一つには材料の木材が得易いからであり、又冬季の低溫のために土壁或は瓦等は含んでゐる水分が凍結してかゝる土地には不適當なためもある。

現在のものはかゝるバラック建のものが多いが、昔時の移住者は既にその地に住んでゐたロシヤ人の家屋に倣つて所謂ロスケ小屋を建築した。このロスケ小屋が現在でも諸所に殘存してゐる。

竹內常行　樺太農業聚落の分布・發達・形態の研究（地理學評論第十一卷第十一號　昭和十年十一月號）に此のロスケ小屋に關する記事がある。

「街村型集村の村々は豐原郡では並川・淸川・大澤・追分・軍川・草野・鈴谷・小沼・富岡・深雪・貝塚・川上等で榮濱郡では圓山・落合・小谷・大谷・黑川・渡瀨・山中・川北・川南・深草等で留多加郡では平野・小里・小原等であつて是等の村々には大抵俗稱ロスケ小屋と稱されて居るフェニル家屋（或ひはイスバ型家屋）と云ふ丸太家屋即ち丸太の兩端の片側に深い凹（クボミ）を作り、之を井桁組として何等のホゾをも用ゐないで、丸太間には蘚苔類をつめてある最小限の加工を施せる家屋で內地人の不得意な建築であるが、此のフェニル家屋が殘つて居る。例へば並川部落で四〇戶、追分部落で一〇戶、軍川部落で二六戶、北平野部落で三五戶、南平野部

落で一八戸、大谷部落で四一戸を筆者は實測した。而して現在でも殘つて居る是等家屋に內地人移民が居住して居るのであつて、植民初期の移民に聞いた所現在の邦人造りの家屋も元全部フェニル家屋であつて移住當時は移民は夫々是等の家に入つた由である。而して現在の聚落型式も當時其のままである由である。事實軍川部落はコの字型の聚落であるが、フェニル家屋の殘存せるものは矢張り此の型式に配列されて居る。」

以上の記事に見える校倉式の木造家屋はロシヤ人の住宅として寒地に屢々見るものである。筆者が昭和六年七月、幌內川下流の敷香の北郊にある土人部落オタス島を訪ねた時に、その地に村長格として居住するウイノクロフ氏の住宅を訪ふたことがあつた。ウイノクロフ氏は白系露人でヤクーツク附近の人であるが、此の地に來つて永住の地を求めたのである。彼の家屋は即ち校倉式の建物で、シベリヤの故地の建方に倣つて造つたものと思はれる。亞寒帶地方の針葉樹が豐富な土地ではこの丸太造の建物は材料の點に於ても組立ての容易な點に於ても便利なもので所謂 log cabin と稱される簡單な小屋としては中歐の山岳地帶やカナダ等に於ても見られるものである。

（完）